

梶山女学園大学・大学院FD活動報告書
(2022年度)

梶山女学園大学・大学院 ファカルティ・ディベロップメント

第10号(通巻 第23号)

2022年度

梶山女学園大学・大学院FD活動報告書

梶山女学園大学・大学院 ファカルティ・ディベロップメント

第10号（通巻第23号）

梶山女学園大学・大学院 FD 活動報告書 (2022年度)

目 次

1	はじめに	全学FD委員会委員長・大学院FD委員会委員長 長澤 唯史	
2	全学FD活動報告		
2-1	全学FD委員会記録		2
2-2	授業アンケート		4
2-3	各種研修		13
3	学部FD活動報告		
3-1	生活科学部		15
3-2	国際コミュニケーション学部		17
3-3	人間関係学部		19
3-4	文化情報学部		22
3-5	現代マネジメント学部		24
3-6	教育学部		25
3-7	看護学部		28
4	大学院FD活動報告		
4-1	大学院FD委員会記録		31
4-2	大学院授業アンケート		32
5	研究科FD活動報告		
5-1	生活科学研究科		34
5-2	人間関係学研究科		37
5-3	現代マネジメント研究科		39
5-4	教育学研究科		40
6	FD委員会名簿		

1 はじめに

はじめに

相山女学園大学全学FD委員会委員長
相山女学園大学大学院FD委員会委員長
長 澤 唯 史

相山女学園大学および相山女学院大学大学院で2022年度に行われたFD活動についての報告書がまとまりましたので、ここにお届けいたします。

2020年1月に新型コロナウイルス感染症が発生して以来、それへの対策が最大の課題となっておりました。それから3年が過ぎ、2023年度はほぼ全学的にコロナ以前の状況に戻った形での教育研究の環境が整ったと感じています。ただそれは完全に旧に復したということではなく、LMSの導入やアクティブラーニングへの取り組み、事前・事後学習のあり方の見直しなど、コロナ禍を契機に導入された教育システムやプログラムなどはそのまま継続しております。まさに災い転じて福というべきか、皮肉なことにコロナ禍が、本学のFD活動に新たな展開をもたらしたということができます。

さらに、令和4年度には大学設置基準の改正が行われ、「学修者本位の教育の実現」が大きな目標として掲げられております。これまでの教育者（教員）目線からの教育のあり方を根本的に見直し、学修者（学生）が教育によってどのように成長し、どのような成果を上げているかを、エビデンスとともに示すことが大学の責任となってまいります。そのために必要なのが学修成果の可視化のシステムですが、これも教務課をはじめとする学内の関係者のみなさんのご努力により、今年度の秋頃から試験的に導入を開始できることになりました。現在は2024年度からの正式な稼働を目指し鋭意準備中です。

この学修成果の可視化のシステムのためのデータをどのように収集し、それをどう活用するかも重要な課題です。単位の修得状況やGPAなどの教務的なデータに加え、授業アンケートや授業時間アンケート、さらにはこれまでキャリア支援を目的として行われていたコンピテンシー・テスト（GPS-Academic）など、これまで各部署で独自に行っていた学生向けのアンケートや調査などを統合し一元化する仕組みも、今後整備していく必要があります。そしてそれは、学生の「学修者本位の教育」の実現のために、これまで行ってきた様々な教育活動をもう一度、その意義を含めて見直すことにつながります。これこそがまさに今後の本学におけるFD活動の根本となることでしょう。

最後に、新たな大学設置基準の中では教職協働の実質化とそのための組織づくりも重要なテーマとなっています。FD活動もまさに教職協働の要となるべきものです。よりよい教育を実現し、受験生から選ばれる大学になるためにも、一人一人の教職員のみなさんにFD活動へのさらなりご理解とご協力をお願いいたします。

2 全学FD活動報告

- 2－1 全学FD委員会記録
- 2－2 授業アンケート
- 2－3 各種研修

(第 1 回) 2022 (令和 4) 年 4 月 26 日 (火) 17 : 00 ~ 18 : 15	1 報告 なし 2 議題 (1) 2022 年度 FD 活動に関する件 ① 2022 年度 FD 活動計画に関する件 ② 2022 年度 FD 活動推進事業予算に関する件 ③ 2022 年度前期授業アンケートに関する件 ④ 2022 年度新任教員研修に関する件 ⑤ 2022 年度 FD 研修会に関する件 (2) 2022 年度前期学生 FD スタッフ申請に関する件 (3) その他
(第 2 回) 2022 (令和 4) 年 5 月 24 日 (火) 17 : 00 ~ 18 : 00	1 報告 (1) 椋山女学園大学改革アクションプラン 2022 について (2) アクティブラーニング実施状況について (3) 2022 年度学部 FD 活動計画について (依頼) (4) 2022 年度前期授業アンケートの実施科目確認について (5) その他 2 議題 (1) 2022 年度前期授業アンケートの調査項目に関する件 (2) 2022 年度後期 FD スタッフ募集要項に関する件 (3) 2022 年度 FD 研修会に関する件 (4) その他
(第 3 回) 2022 (令和 4) 年 6 月 28 日 (火) ~ 7 月 4 日 (月) メール会議	1 報告 なし 2 議題 (1) 2022 年度 FD 研修会に関する件 (2) 2022 年度前期授業アンケートリフレクションに関する件 (3) その他
(第 4 回) 2022 (令和 4) 年 7 月 26 日 (火) 17 : 00 ~ 17 : 25	1 報告 (1) 2022 年度学部 FD 活動計画について (2) その他 2 議題 (1) 2022 年度後期学生 FD スタッフ申請に関する件 (2) 2022 年度 FD 事業推進予算に関する件 (3) 2022 年度後期授業アンケート実施要領等に関する件 (4) その他

(第 5 回) 2022 (令和 4) 年 9 月 27 日 (火) 17:00~18:20	1 報告 (1) 2022 年度学部 FD 活動について (2) 2022 年度 FD 研修会実施状況について (3) 2022 年度前期授業アンケート実施状況について (4) 2022 年度後期授業アンケート実施科目 (1 / 4 期科目) の確認について (5) その他 ① 2022 年度後期授業アンケートに係るスケジュール確認について 2 議題 (1) 2023 年度シラバス項目に関する件 (2) 2023 年度 FD 事業推進予算に関する件 (3) その他
(第 6 回) 2022 (令和 4) 年 10 月 25 日 (火) メール会議	1 報告 (1) 2022 年度 FD 研修会実施状況 (最終状況) について (2) 2022 年度後期授業アンケート (実施科目確認) について (3) その他 2 議題 なし
(第 7 回) 2022 (令和 4) 年 11 月 22 日 (火) 17:00~17:35	1 報告 (1) 椋山女学園大学中長期計画実施計画第 I 期 (椋山女学園大学改革アクションプラン 2022) 検証について (2) 2022 年度 FD 活動の検証 (中間検証) と 2023 年度計画について (3) 2023 年度新任教員研修計画について (4) その他 ① 学部 FD 講演会等 (全学 FD 事業推進予算からの支出分) の学内周知について 2 議題 (1) 2022 年度後期授業アンケートリフレクションに関する件 (2) 2022 年度「今年度の振り返り」と「来年度の目標」に関する件 (3) 2022 年度 FD 活動報告書に関する件 (4) その他
(第 8 回) 2023 (令和 5) 年 1 月 24 日 (火) ~ 2 月 1 日 (水) メール会議	1 報告 (1) 2023 年度 FD 推進事業予算 (新規予算要求裁定結果) について (2) その他 ① 各種日程の確認について 2 議題 (1) 2022 年度 FD 活動の検証と 2023 年度の計画に関する件 (2) 2023 年度前期学生 FD スタッフ募集に関する件 (3) その他
(第 9 回) 2023 (令和 5) 年 3 月 23 日 (木) メール会議	1 報告 (1) 2022 年度後期授業アンケート結果について (2) 2022 年度「今年度の振り返り」と「来年度の目標」の入力結果について (3) 2022 年度後期学生 FD スタッフ成果報告書について (4) その他 2 議題 なし

【前期】

1. 実施概要

・実施期間：2022年7月11日（月）～7月30日（土）

・実施対象科目：

◎専任教員

2022年度前期開講の授業科目のうち、卒業研究、受講者数が10名未満の科目を除く全ての授業科目から、できるだけ受講者の多い科目を2科目以上選択

◎非常勤教員

2022年度前期開講の授業科目のうち、集中講義など、実施期間・実施予備期間に授業を行わない科目を除いた全科目

・実施方法：Webによる

2. 実施科目数及び実施率

学 部	対 象 科目数	実 施 科目数	実施率	未実施 科目数
生 活 科 学 部	161	137	85.1 %	24
国際コミュニケーション学部	171	147	86.0 %	24
人 間 関 係 学 部	110	87	79.1 %	23
文 化 情 報 学 部	118	90	76.3 %	28
現代マネジメント学部	75	54	72.0 %	21
教 育 学 部	137	125	91.2 %	12
看 護 学 部	73	58	79.5 %	15
教 職 共 通 開 講	16	14	87.5 %	2
計	861	712	82.7 %	149

※「未実施科目数」＝回答率が0.0%の科目

※参考：2021年度前期授業アンケート実施率（Webで実施） 78.4%（696/888科目）

※授業がアンケート実施前に終了する科目、担当者が交代した科目等は対象科目から外した。

3. 総合的充実度（設問12）回答

「設問12 総合的にみてこの授業は充実していた。」

学 部	そのとおりである	どちらかといえば そのとおりである	どちらかといえば そうではない	そうではない
生 活 科 学 部	61.9%	25.5%	6.5%	3.8%
国際コミュニケーション学部	76.3%	16.6%	3.4%	0.8%
人 間 関 係 学 部	69.8%	24.7%	3.9%	1.6%
文 化 情 報 学 部	63.6%	26.8%	4.3%	1.2%
現代マネジメント学部	72.6%	21.8%	1.8%	0.9%
教 育 学 部	76.1%	20.0%	2.4%	0.3%
看 護 学 部	80.3%	13.9%	1.3%	0.5%
教 職 共 通	63.1%	32.9%	2.7%	0.9%
大 学 全 体	70.5%	22.8%	3.3%	1.3%

4. リフレクションの提出状況 学部別提出率

学 部	アンケート 実施科目数	リフレクション 提出科目数	リフレクション 提出率
生 活 科 学 部	137	79	57.7%
国際コミュニケーション学部	147	102	69.4%
人 間 関 係 学 部	87	54	62.1%
文 化 情 報 学 部	90	60	66.7%
現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	54	40	74.1%
教 育 学 部	125	86	68.8%
看 護 学 部	58	35	60.3%
教 職 共 通 開 講	14	13	92.9%
全学部 (昨年度前期実績)	712 (696)	469 (518)	65.9% (74.4%)

10月末に集計結果及びリフレクションの学内開示（S*mapのキャビネット）

【後期】

1. 実施概要

- ・実施期間：（1 / 4 期科目）2022年11月4日（金）～2022年11月22日（火）
（半 期 科 目）2022年12月21日（水）～2023年1月25日（水）

- ・実施対象科目：

◎専任教員

2022年度後期開講の授業科目のうち、卒業研究、受講者数が10名未満の科目を除く全ての授業科目から、できるだけ受講者の多い科目を原則2科目選択

◎非常勤教員

2022年度後期開講の授業科目のうち、集中講義など、実施期間・実施予備期間に授業を行わない科目を除いた全科目

- ・実施方法：Webによる

2. 実施科目数及び実施率

学 部	対 象 科目数	実 施 科目数	実施率	未実施 科目数
生 活 科 学 部	149	123	82.6%	26
国際コミュニケーション学部	160	129	80.6%	31
人 間 関 係 学 部	111	85	76.6%	26
文 化 情 報 学 部	123	94	76.4%	29
現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	89	68	76.4%	21
教 育 学 部	125	96	76.8%	29
看 護 学 部	40	36	90.9%	4
教 職 共 通	10	8	80.0%	2
計	808	639	79.2%	168

※「未実施科目数」=回答率が0.0%の科目

※参考：2021年度後期授業アンケート実施率（Webで実施）81.0%（681/841科目）

※授業がアンケート実施前に終了する科目、担当者が交代した科目等は、対象科目から外した。

3. 総合的充実度（設問12）回答

「設問12 総合的にみてこの授業は充実していた。」

学 部	そのとおりである	どちらかといえば そのとおりである	どちらかといえば そうではない	そうではない
生 活 科 学 部	65.8%	24.9%	4.1%	2.0%
国際コミュニケーション学部	78.6%	14.1%	2.7%	0.9%
人 間 関 係 学 部	71.0%	19.7%	3.3%	0.3%
文 化 情 報 学 部	72.0%	21.6%	3.1%	1.2%
現代マネジメント学部	69.9%	23.9%	1.2%	2.3%
教 育 学 部	75.2%	19.0%	1.8%	1.0%
看 護 学 部	72.7%	21.6%	1.6%	0.7%
教 職 共 通 開 講	73.7%	15.7%	2.2%	1.8%
大 学 全 体	72.4%	20.1%	2.5%	1.3%

4. リフレクションの提出状況

学部別提出率

学 部	アンケート 実施科目数	リフレクション 提出科目数	リフレクション 提出率
生 活 科 学 部	123	90	73.2%
国際コミュニケーション学部	129	89	69.0%
人 間 関 係 学 部	85	57	67.1%
文 化 情 報 学 部	94	66	70.2%
現代マネジメント学部	68	47	69.1%
教 育 学 部	96	74	77.1%
看 護 学 部	36	21	58.3%
教 職 共 通 開 講	8	7	87.5%
全学部 (昨年度後期実績)	639 (681)	451 (521)	70.6% (76.5%)

3 月末に集計結果及びリフレクションの学内開示（S*mapのキャビネット）

2022年度授業アンケート（前期）結果

1. 実施の目的

学生による授業アンケートは、授業が学生にどのように受け止められているのかの全体的傾向を理解し、教員に対して授業の質的向上のヒントを提供することを目的とする。また、学部・学科及び大学全体としてのカリキュラムレベルでのFDを推進するための資料として活用する。

2. 実施時期

実施期間：2022年7月11日（月）～7月30日（土）

3. 実施方法

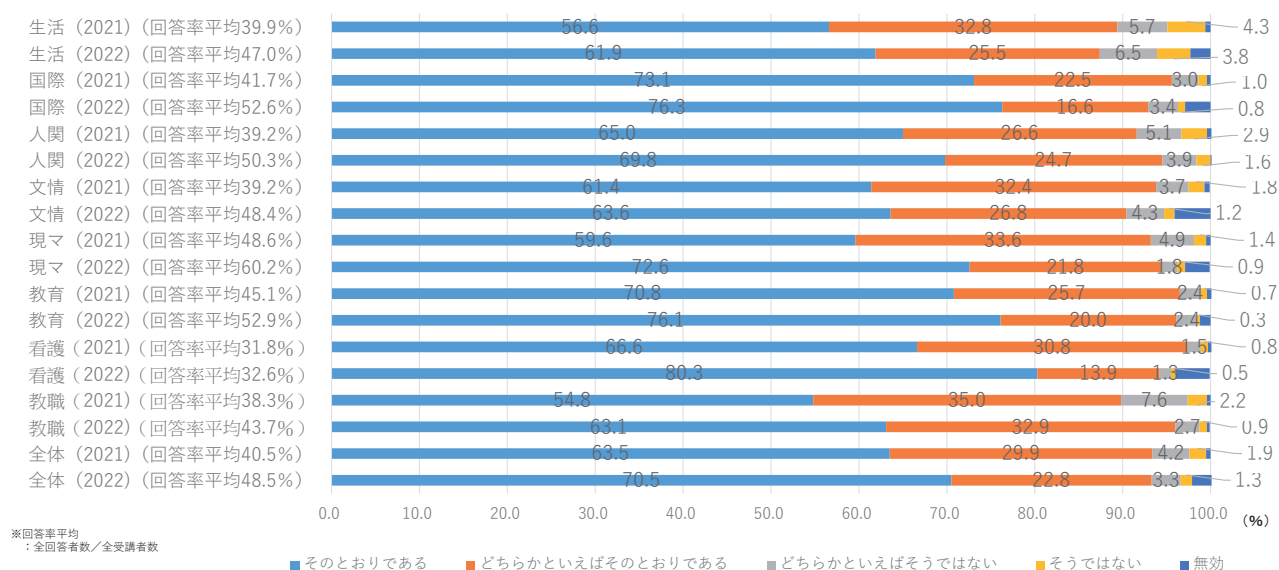
Webによる

4. 実施科目数

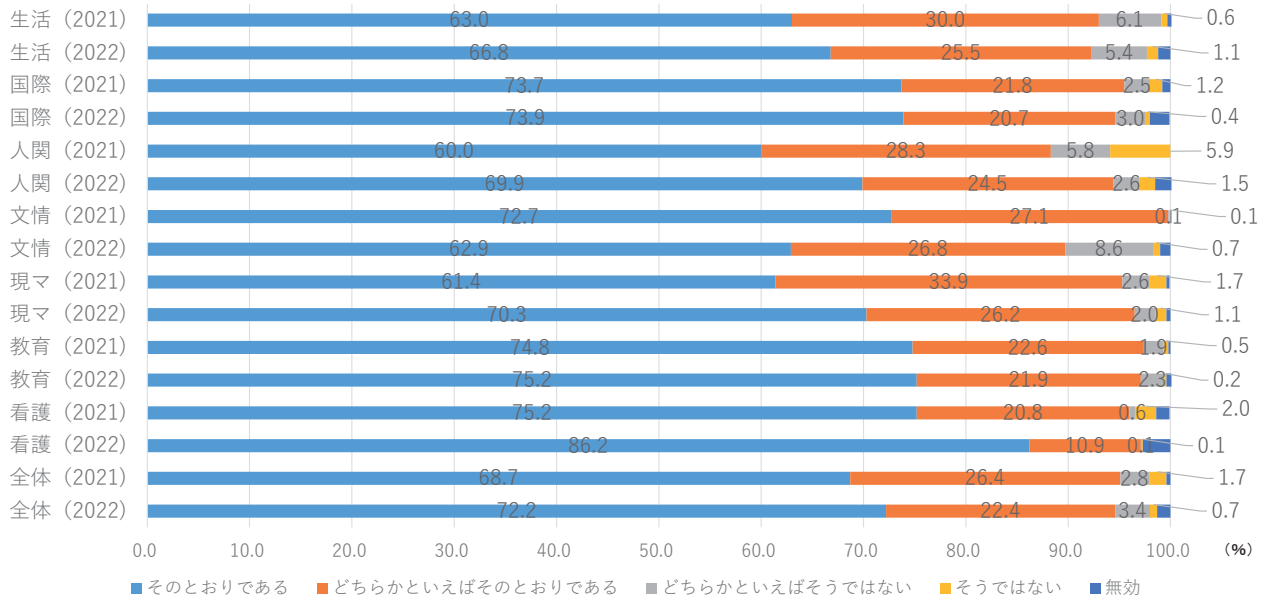
	2021年度前期 (Webによる)	2022年度前期 (Webによる)
生活科学部	124	137
国際コミュニケーション学部	141	147
人間関係学部	94	87
文化情報学部	86	90
現代マネジメント学部	67	54
教育学部	125	125
看護学部	46	58
教職共通開講	13	14
大学全体	696	712

集計・分析結果

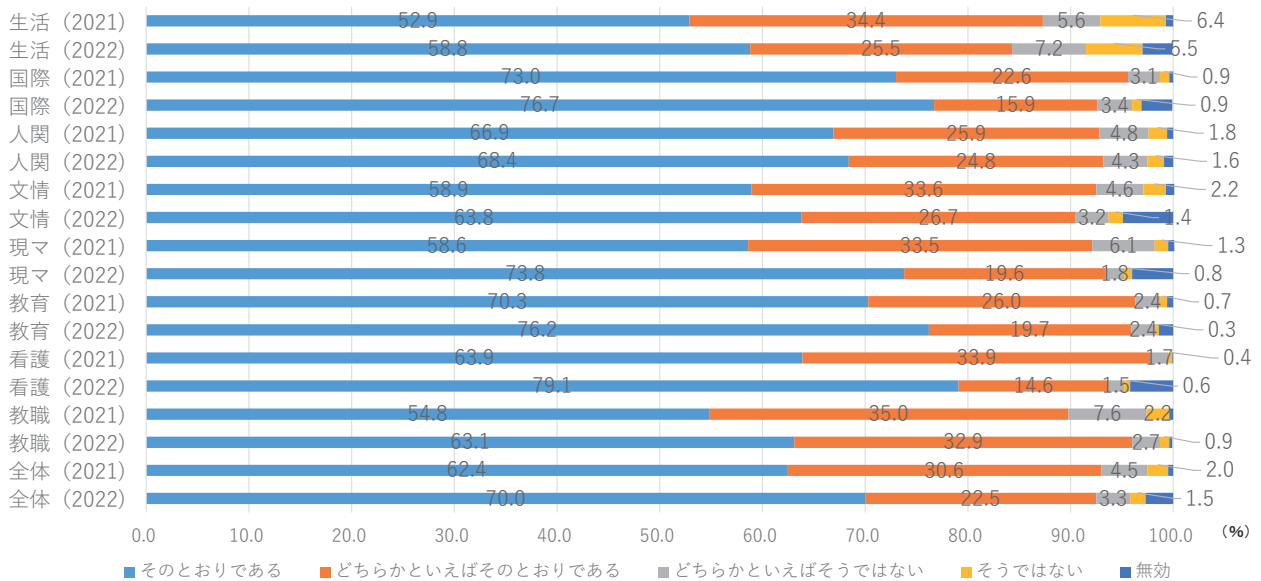
総合充実度（全体）



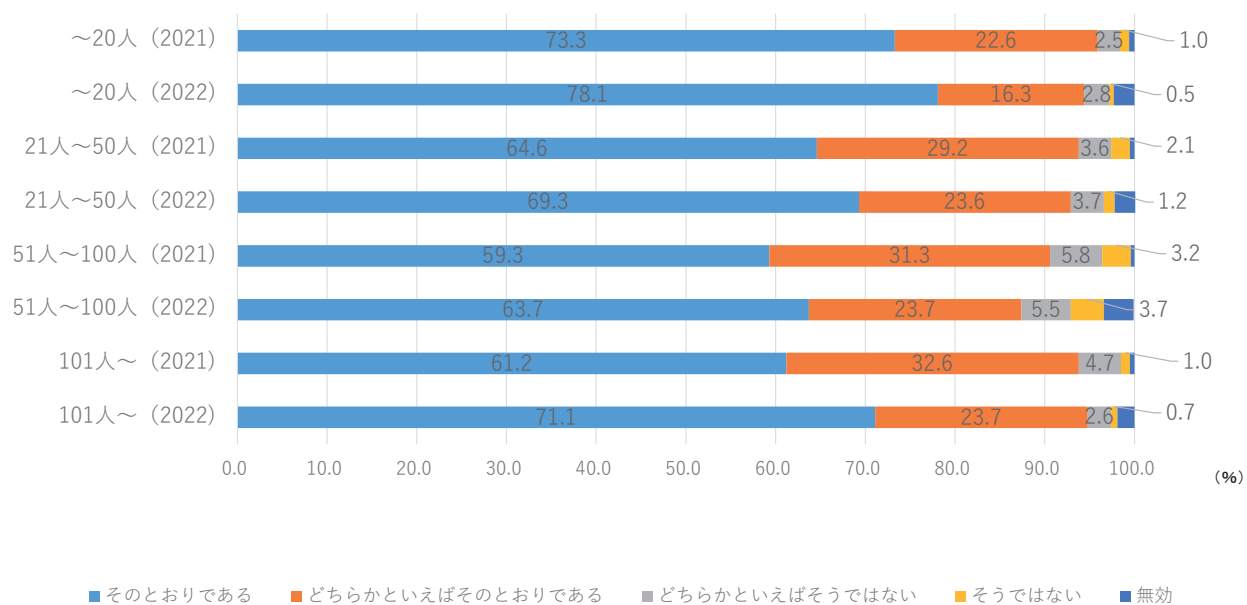
総合充実度（教養）



総合充実度（専門）



総合充実度（受講者数別）



2022年度授業アンケート（後期）結果

1. 実施の目的

学生による授業アンケートは、授業が学生にどのように受け止められているのかの全体的傾向を理解し、教員に対して授業の質的向上のヒントを提供することを目的とする。また、学部・学科及び大学全体としてのカリキュラムレベルでのFDを推進するための資料として活用する。

2. 実施時期

実施期間（1/4期科目）2022年11月4日（金）～2022年11月22日（火）
（半期科目）2022年12月21日（水）～2023年1月25日（水）

3. 実施方法

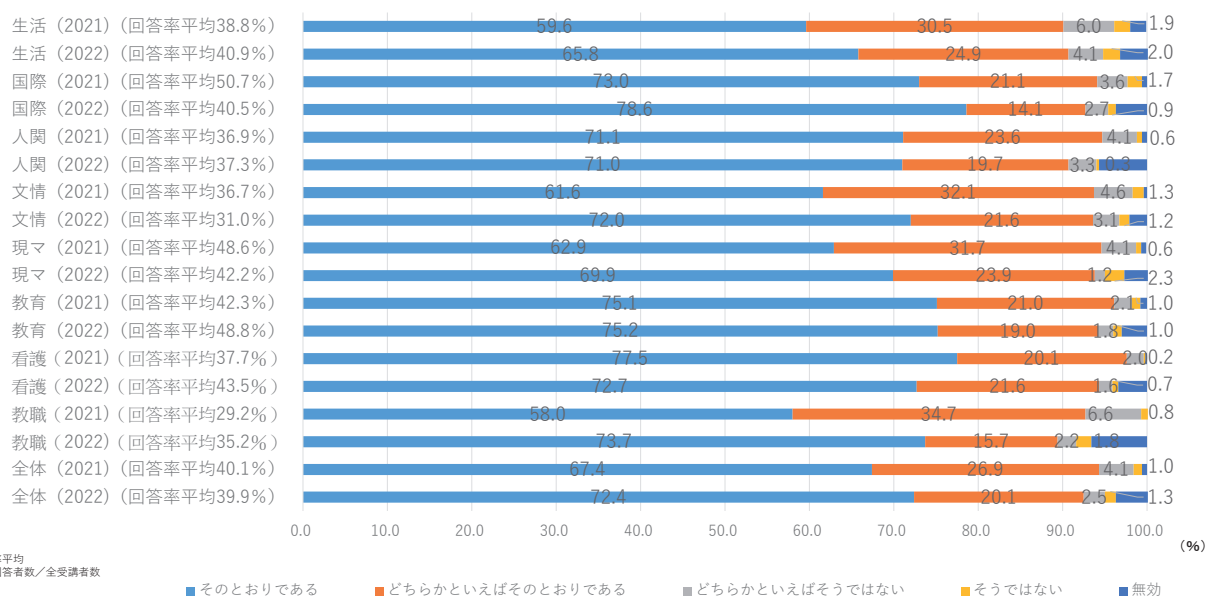
Webによる

4. 実施科目数

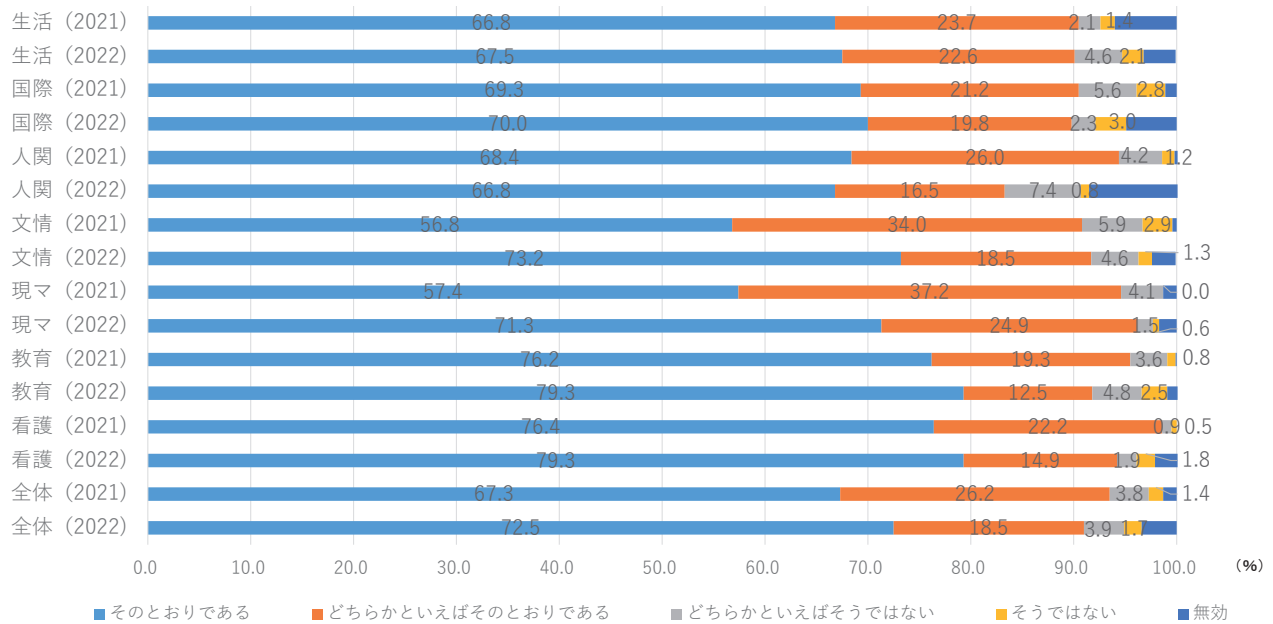
	2021年度後期(Webによる)	2022年度後期(Webによる)
生活科学部	134	123
国際コミュニケーション学部	138	129
人間関係学部	91	85
文化情報学部	104	94
現代マネジメント学部	57	68
教育学部	108	96
看護学部	39	36
教職共通開講	10	8
大学全体	681	639

集計・分析結果

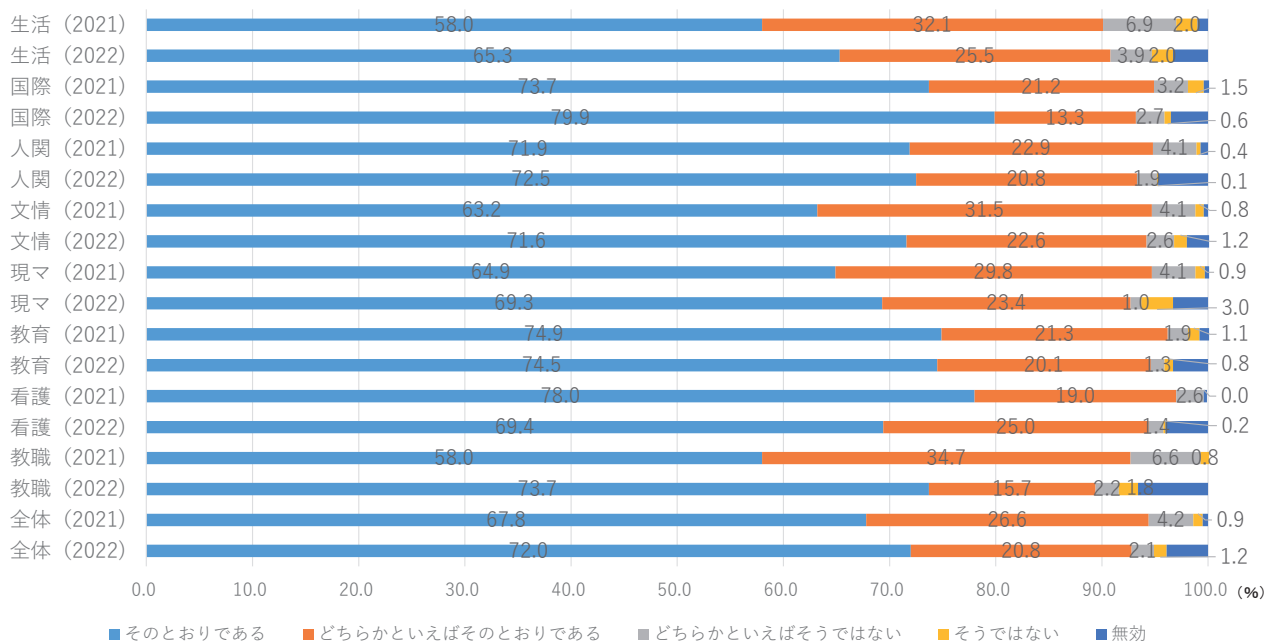
総合充実度（全体）



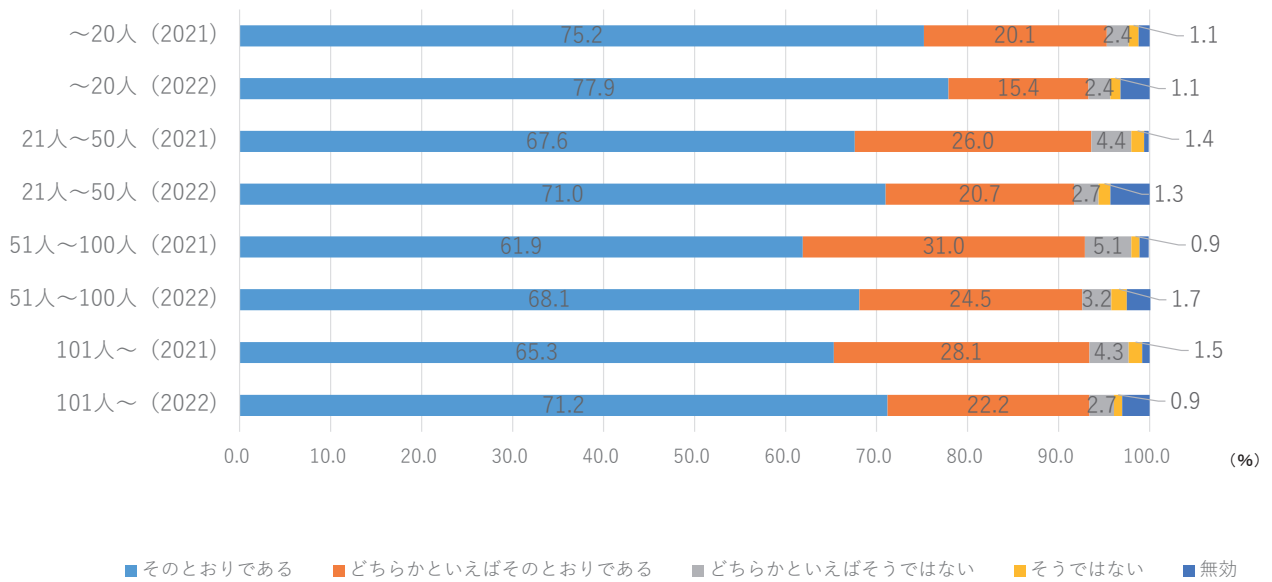
総合充実度（教養）



総合充実度（専門）



総合充実度（受講者数別）



1. FD研修会

- ・日時：2022年9月6日（火） 10：00～11：30
- ・場所：Zoomでのオンライン開催
- ・テーマ：メンタルヘルス要支援学生への対応について
- ・講師：橋本容子 相山女学園大学学生相談室主任カウンセラー
水谷誉子 相山女学園大学学生相談室カウンセラー
- ・参加者数（オンデマンド視聴を含む。）：

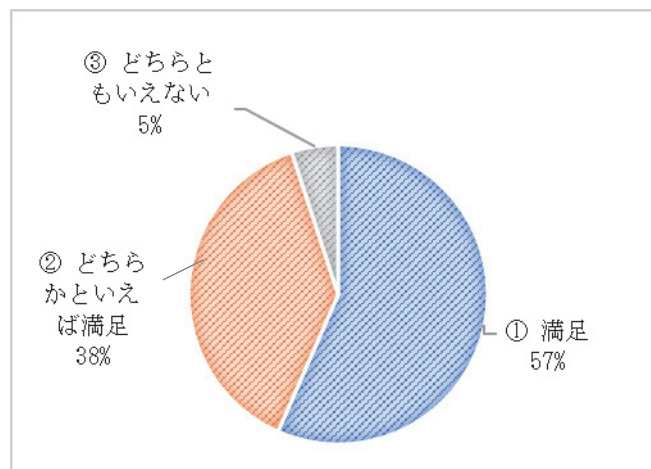
生	国	人	情	現	教	看	合計
40名 (97.6%)	27名 (100%)	28名 (87.5%)	25名 (96.2%)	23名 (100%)	26名 (96.3%)	32名 (71.1%)	201名 (91.0%)

※その他事務職員等45名、合計246名

《アンケート集計結果》

Q. 今回の研修会について全体としての満足度をお答えください。（名）

①満足	②どちらかといえば満足	③どちらともいえない	④どちらかといえば不満	⑤不満
90	61	8	0	0



3 学部FD活動報告

- 3－1 生活科学部
- 3－2 国際コミュニケーション学部
- 3－3 人間関係学部
- 3－4 文化情報学部
- 3－5 現代マネジメント学部
- 3－6 教育学部
- 3－7 看護学部

生活科学部FD委員

(管理栄養学科) 加藤昌彦、三田有紀子

(生活環境デザイン学科) 井上尚子、川口香子

(学部長・オブザーバー) 本山 昇

【1】活動計画 (目標)

- ①積極的な提案や活動が生まれるよう、FD活動の広報を工夫すること。また、学部のFD活動を推進するために、学部教職員からの提案を積極的に募ること。
- ②全学実施の授業アンケートの参加率を高め、その回答を有効に利用すること。
- ③予定されている学科行事をつつがなく実行すること。

【2】実施報告

①委員会の開催

委員会は2022年4月～2023年3月の間、適宜メール会議または対面にて実施した。協議事項については、FD委員会あるいは各学科会議・教授会にてそれぞれ臨機応変な手段で協議・決定した。

<協議事項>

- ・昨年と同様に授業アンケートは、webで実施し、実施要領とリフレクションを確認。
- ・学部FD活動計画を確認。
- ・例年と同様に、「今年度の振り返り」と「来年度の目標」の実施要領を確認。

②購入した書籍

FD活動に予算が割り当てられなかったために該当する執行はなかった。

③2022年度に企画・実施されたFD活動

2022年6月 主に3年生を対象としたOG懇談会開催。社会人として活躍している本学卒業生と在学生の交流を通して、教員の教育技法の改善につなげる。同時に、学生は、就職を中心に将来の方向性の選択に役立てることで教育環境の整備につながるものと考えられた(管理栄養学科)。

2022年7月 授業アンケート実施(全学)

2022年7月 教員の教育技法の改善につなげるため、国家試験に精通したプロフェッショナルによる国家試験受験・合格の心構えに関する講義、および模擬授業を実施していただいた(管理栄養学科)。

2022年9月 FD研修会(全学)

2022年12月～2023年1月 授業アンケート実施(全学)

2023年1月 学生ヒアリングの実施(生活環境デザイン学科)

2023年1月 教育環境整備、および教育技法改善のために専門家を招聘して、臨地実習前の2年生を対象に、マナー講座を開催した(管理栄養学科)。

2022年12月～2023年3月 「今年度の振り返り」と「来年度の目標アンケート」の実施(全学)

2023年3月 卒業時アンケートの実施(生活環境デザイン学科)

【3】課題点

- ・目標①については、学生に実施した授業アンケートの実施率が前期85.1%(昨年78.5%)、全学82.7%、後期82.6%(昨年82.2%)、全学79.2%となり、昨年度の実施率と比べて全学での値よりや

や高いものの、大幅な増加にはつながっていない。アンケート実施の呼びかけを行っているのであるが、Webでの実施であるために入力を忘れたり、実施に際し学生への伝達ミスなどが挙げられる他、学生へ伝達をしたり、時間をとっているのにもかかわらず送信ミスのためにカウントされなかったりすることも考えられるため、今後のさらなる対応を検討する必要がある。また、リフレクションペーパーの提出状況は前期57.7%（昨年78.2%）、後期73.2%（昨年73.9%）で昨年より低く前期では全学の値からも低い結果となった。次年度は、今年度の経験を踏まえて、FD活動の意義を説明したうえで、新しい方法を取り入れるなどの積極的な提案や活動が生まれるよう努めたい。学生へのアンケートはもう一度Webでの実施ではなく紙面で行ったかどうかなどの意見があがった。

- ・目標②については、FD研修などへの参加の呼びかけを行った。9月に実施したFD研修会の出席率は97.6%で全学91.0%とほぼ同等以上の出席率で、昨年度の87.5%よりさらに多い結果となった。参加の呼びかけを行った結果であり、今後も継続して参加の呼びかけが必要である。昨年度に引き続き学部にはFD活動のための予算がないが、その中でもできる活動の検討を今後も重ね、充実するように努める。
- ・目標③については、例年通り予定通り実施するに至った。また、授業における学生FDスタッフの活用では、1件応募があった。授業の質の向上につなげることができ、有益であった。今後も、学部への広報活動をして運用方法等を検討する必要がある。また、本年度は生活環境デザイン学科において4年生17名に学生ヒアリングを行い、分野教育（専門・資格）や卒業研究などについて率直な意見を聞くことができた。これより改善できるところは改善につなげていく。

【4】次年度へ向けた計画

今年もCOVID-19に影響された1年ではあったが、授業は対面授業がすべての科目で行われた。2022年度に元々掲げていた目標は概ね達成されたが、今後も新しい様式を含めてFD活動を積極的に推進していく必要がある。その方法としては、例年と同じように①FD研修会（全学）のような参加型のFD活動に対して学部教員の参加を促すこと、②FD活動の活性化を促すために積極的な提案やそのためのアナウンスの仕方を工夫すること、③FD活動の実施報告が増えるよう、学部の協力のもと様々な活動を実現するなどが挙げられる。状況が変化していく中でこの活動を推進するためには、既存の学部FD活動に新しい形式を含めた現状をより詳細に分析し、内容の精査を図る必要も出てくるかもしれない。

「授業アンケート」において、総合充実度は、肯定意見が前期89.4%、後期90.1%で昨年と同じ値で、高値である。しかし、回答率が低い授業も見られ、今後も教員の個人あるいはグループレベルでの更なる改良を試みることが求められる。

したがって、これらの結果を有効に活用し、教員個々の研鑽と同時にその成果をどのように授業に反映させるか、学生FDスタッフの活用など様々な方向から次年度も検討していきたいと考える。

今年度も卒業時アンケートを実施することができ、例年と同じく得られる結果はさらなる授業改善の材料となると考えられる。今後は、その卒業時アンケートの実施内容について引き続き検討することが必要であろう。

【1】活動計画（目標）

- ・ 学生が各々の4年間の学習達成度をディプロマポリシーに照らし合わせ自己評価してもらうことで、ディプロマポリシーの点検を行う。
- ・ FD活動を推進するために、授業確認と改善を検討する。

【2】実施報告**1. 4年間の学修の成果を問うアンケート調査の実施**

調査時期：卒業式 2023年3月15日

調査内容：大学／学部での学びの到達度の指標「Can do list」をgoogle formで実施した。

「Can do list」は4年間期末ごとに資料の探し方、読み方、研究倫理、レポート・論文の書き方、発表の仕方の各項目を自己チェックできる指標として2019年から学部で導入した到達度チェックリストである。ファーストイヤーゼミで配布しているが、その後のチェックは自分で行っているため、卒業時の学生の到達度を確認することを目的として、卒業式を利用したアンケートを実施した。

調査結果：3月15日付で卒業した言語コミュニケーション学科109人中94人（回収率86.2%）、表現文化学科95人中46人回答（回収率48.4%）。

資料の探し方に関する項目で、図書館内の資料に関しては79.3%と8割近くが利用できるようになっていたが、電子書籍や雑誌論文に関しては32.2%と3割近くが分かっていなかった。それぞれ昨年87.3%、18.5%であったことを考えると、卒論を書いた後であるにもかかわらず、資料の検索の力が落ちているといえよう。他の図書館からの取り寄せ方法については57.6%が分からないと答えている。昨年84.1%であった、「適切な資料を探し出すことができるようになった」という項目も75.0%であり、図書館利用には課題が残る。資料を読み解く力も昨年度9割前後達成していたものが8割前後に下がっている。研究倫理、書き方、発表等に関しては9割以上の達成が見られた。自由記述では、「社会に出ていく中で必要なスキルがこの学部で身につけることができた」、「忘れられないキャンパスライフを過ごすことができた」、「人間になるという教訓そのもの、本質の学びを得ること」ができた、「ジェンダー論をはじめとして、女子大ならではの学びができてとても充実して」いた、「栢山に入って良かった」といったコメントが見られた。4年間での学びに課題の残る学生も見られたものの、おおむね達成して卒業を迎えることができたといえよう。

2. 授業課題に関するアンケート調査の実施

調査時期：2023年1月～2023年2月

調査目的：学修成果の充実と合わせて、授業の事前事後指導の明文化が求められるようになっている昨今の状況で、毎回の授業の課題の内容について確認することを目的とする。また最近、授業アンケートをはじめとして、学生から「課題が多すぎる」との意見も散見されたため、2022年6月16日に行われた学業優秀者の表彰時に、当該学生に課題についての意見を収集した。その結果、成績優秀者はそれほど課題が負担にはなっていないと回答した。これは学力の差が負担感の差ともなっているといえる。一方、コロナ禍でオンライン授業とともに利用が進んだgoogle classroom等を用いた課題提出は、学生の意見を容易に収集できるツールとなっており、その現状もあわせて調査することとした。

調査内容：毎回の講義で実施している課題について専任教員に調査を実施した。

調査結果：専任教員28人中18人（回収率64.3%）。

毎回の講義で実施している課題内容としては、授業内容のまとめや、コメントと疑問点・質問を記述させる教員が多い。また授業内容に関連する課題を解答させたり、授業に関連する具体的な事例を探したり発展的に学びを深めるための工夫をしている教員が多かった。紙での提出よりも google classroom の利用が多くなっているのは今回の調査の特徴である。

フィードバックについては、個別に質問に答えたり、採点をして返答したりする方法と、次回の授業で無記名の回答例を紹介しながら解説しているという方法が見られた。いずれにしてもフィードバックは重視していた。

課題提出に際して、多くの教員が、学生の理解度の確認と自発的な学びへつなげることができるようにすることを留意していた。文章を書かせる力をつけることも重要視している。

効果的であると考える課題提出としては、学生の知的好奇心を高めるもの、自ら考えることができるようになること、唯一の正答を求めるのではなく、多様な視点から考察できるようになることなどがあげられている。課題を手掛かりに学生が疑問点を認識し、理解を深め、発展的に考える力を身につけることができるようにと、教員が考えていることが分かった。

【3】2022年度の振り返り

2022年度は2021年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、受講者数の制限が行われたものの、対面での授業が実施された。遠隔授業の中で google classroom を利用した課題の提出が増加し、学生の中には課題が多すぎるという意見も見られるようになった。一方、教員は、classroom を学生とのコミュニケーションの手段として、あるいは課題を集める便利な手段として利用していた。事前事後指導の時間が定められるようになる中で、学生の負担と実質的に遂行可能な課題について検討していくことが必要である。

【4】次年度に向けた計画

今年度に引き続き、学生の学習達成度の確認からディプロマポリシーを検証していく。とくに2023年度より、コンピテンシーテストを利用して学修成果を測定する方向が強く促進されることになるので、教員・学生双方に、実施後の意見を聴取することを予定している。また、アフターコロナに対応した授業のあり方、教員と学生との関係性についても検討する。

【1】本年度のFD活動の目標

本学部では2023年度に「『成績評価の客観性、厳格性、公正性、公平性を担保するための処置』をどのように取っているか」という観点からの自己点検評価作業が予定されている。そこで本年度の学部FD活動として、次年度の自己点検評価作業のための準備作業として、この評価項目に係る学部教員の成績評価に関する意見やアイデアを交換するミーティングを学科単位で行うこととした。以下にその結果概要を報告する。

【2】学部FD活動の概要

各学科でのミーティングで出た意見の概要を報告する。

1. 人間関係学科意見交換会 概要 (22/10/4, 11/1 開催)

テーマ：成績評価の客観性、厳格性、公正性、公平性を担保するための処置

第1回はテーマについて自由に意見・感想等を出し合う、第2回はそれを踏まえてさらに深く意見を交換するという趣旨で開催

第1回10/4 参加人数：14名 第2回11/1 参加人数：13名

@意見概要**1) 成績についての学生からの問い合わせについて**

- ・なぜ不合格なのかという問い合わせへの対応としては、教員個々人が合否の基準を言葉で説明できるようにしておく必要がある。
- ・努力が評価されていないというクレームにどう対応すべきか。
- ・資格関連科目などは合格ラインが明確なので、それをあらかじめ授業で確認している。
- ・どの科目でも合否の基準について、シラバスや授業の初めなどで学生に説明した方が良い。

2) 成績評価分布の偏りについて

- ・教養教育で採用しているような標準的分布を基準にするというやり方は、科目教育内容や受講学生が違うので、無理がある。
- ・そういうやり方をするなら教科書等を統一するなど内容を同じものにすべき。
- ・そういうやり方は科目の内容が異なる専門教育には適用できない。
- ・そもそも教員は全員がSを取ることを理想として教えているのであり、それに近づくことは望ましいこと。
- ・オールSは現実にはあり得るのかと思ったので、科目長としてその場合には先生に確認したことがある。
- ・授業をやる場合、教員は学生の内容理解についての期待水準を設定すると思うが、オールSとかオールCのような極端な結果の場合にはその期待水準が受講学生の学力・能力に合っていないと考えて、授業内容と期待水準を調整する必要がある。
- ・卒論の評価の仕方について全学共通の合意のようなものは無いのか、提出できれば全て同じ評価にしている例を聞いたことがあるが。

3) 成績評価の客観性・厳格性・公平性について

- ・教育目標・到達目標を明確に立てておけばそれを基準にして厳格・公平かつ客観的に評価できる。
- ・例えば穴埋め等の出題形式でやれば厳格な客観的評価に近づけると思うが、そうした出題形式は知識の有無を評価するだけで、大学で学ぶことについての評価としてどうなのか。
- ・評価は各教員が個人の責任において行うので、最終的には個人の主観的判断になる。
- ・グループごとの作業をさせている場合、時間配分などに差が出るため、その評価に際して不公平であるとのクレームが学生から出る。
- ・複数のクラスがある場合、クラスが違えば全体として公平に評価することは難しい現実がある。
- ・努力点のようなものは大学の評価としてどのように考えたら良いのか、演習などではそうした評価を加味することになるが。
- ・演習で志願して最初に発表した者にはファーストペンギンとしての評価をしている。
- ・厳格に素点で採点すると、例えばAとBのボーダーの点について最終的評価を決める際に苦勞する。
- ・チュートリアルセミナーでどの先生がSやAを取りやすいなどの情報を教えているのを目にするが、そうした良い評価を取りやすい授業を取ろうとする学生の受講態度を増長するような雰囲気はいかがなものか。
- ・自分が学生の頃は合格評価をもらうのが難しい先生の講義もその授業を聞きたいので敢えて取るという行動は学生として当たり前という感じがあったが。
- ・教員間で評価の仕方やそこでの工夫などを話し合う情報交換の場がある方が良い。
- ・その授業の評価の仕方や基準について、事前に学生に周知させておくことが基本では。
- ・評価は学生の質を無視しておこなうことはできない。学生の質は年度ごと、授業ごと、あるいは学部学科ごとに異なる。
- ・成績評価は各教員が担当授業について各学生を評価することが基本であって、そこでの評価は授業内容の特性や教員の評価基準、さらに受講学生の質によって決まる。それらを単純に総合してGPAとして指標化したときにそれが何を意味するのか。評価は多元的なものであるから、その総合は極めて限定的な意味しか持たないのであって、それを踏まえてGPAは用いるべきである。

@論点整理

1. 成績評価の客観性・厳格性・公正性・公平性の意味内容について教員や組織で共通理解をしておく必要がある
2. 個々の学生への次元の成績評価の問題と受講学生全体の次元の成績評価の問題は、まずは分けて考える必要がある
3. 受講学生に何を期待するかの違いが授業科目によって出てくることを踏まえて考える必要がある
4. 学生の質の違いや授業への期待や取り組み態度などの学生側の要因をどのように組み込んで評価基準を設定するかを考える必要がある
5. 学生が、大学の授業やそこでの評価に何を期待するかということと併せて、教員側の評価問題を考える必要がある
6. 教員個人の次元での成績評価における課題と、教員組織の次元でのその課題について、それぞれ検討する必要がある

2. 2022年度心理学科意見交換会 概要 (9/6,10/4,11/1開催)

テーマ：成績評価の客観性、厳格性、公正性、公平性を担保するための処置

第1回は本会の趣旨について説明、第2回はテーマについて自由に意見・感想等を出し合う、第3回はそれを踏まえてさらに深く意見を交換するという趣旨で開催。なお第3回11/1は、長く議論の時間を確保できなかったため、11/4まで延長して意見を受け付けた。

第1回9/6 14名参加、第2回10/4 14名参加、第3回11/1 14名参加

@意見概要

1) 絶対評価、相対評価について

- ・Sは何%、A、B、Cはそれぞれ何%など成績人数比について、教養科目では参考値としてあげられている。しかし、シラバスの到達目標に達したと考えるならば、参考値とは関係なく、全員Sでよい可能性もある。教科ごとの到達基準をより優先してもよいかもしれない。
- ・知識習得を重視する授業以外（ケースメソッドなど）の場合、評価法はより多様になるが、客観性・厳格性・公正性・公平性を優先しようとする、量的評価以外難しく、悩ましい問題がある。逆にLMSを過度に授業に導入することで、評価が厳密的になりすぎている可能性もある。授業内容や受講者の教育的意味を考えると、相対評価だけでなく、絶対評価の側面も非常に重要である。

2) 受講者の科目へのニーズ

- ・到達目標を事前設定したとしても、公認心理師資格指定科目などはすでに内容が明確化されており、実際の受講者の学力の幅を考えると全員には適用しづらい。また学力の幅だけでなく、受講目的（資格取得、自身の興味、時間割上の取りやすさなど）も多様であるため、いくら事前説明を丁寧に行っても、難易度や到達水準のバランスをとることは非常に難しい。先生方は以下の工夫などをされている。
 - 小テストを授業ごとに細かく実施、中間テストの実施など。
 - 受講者自身がテーマと関連する新聞記事をclassroomにupする主体的なワーク。

3) 幅広い学力、意欲に対応することの難しさ

- ・必須科目の心理統計、心理実験、心理学概論などは、低年次科目のため受講者の興味・関心を中心に沿いたいところが、同時に公認心理師選抜で評価対象となる科目でもあるため、評価判断が難しい。復習課題（選択式）による加点、筆記試験前によい例、悪い例などの補足資料を配布する等、丁寧な配慮を行ったとしても全く学習・参考にせず、最終試験に臨む学生も一定数存在する。厳格性や客観性を追求すると、受講者の今後の学習カリキュラムに影響する場合も出てくる可能性があり、そのバランスが難しい。

4) 試験の実施について

- ・オンラインの導入により、試験のカンニング防止が難しくなる（予測が難しい状況になる）場合も増えている。

【1】活動報告

本年度の文化情報学部FD委員会では、「ループリック評価の導入をはじめとした新しい大学教育の動向について、学部構成員の理解を深めること」を目的として、「ループリックを中心とした新しい大学教育の動向に詳しい外部講師を招へいし、講演会を実施する」ことを目指して活動してきた。具体的な講師の選定にあたっては、教育工学を専門とする亀井美穂子准教授にご相談に乗っていただき、関西大学教育推進部教授の岩崎千晶氏に講師をお願いすることとなった。

岩崎氏は関西大学博士課程を2010年に修了し博士（情報学）を取得、2010年より関西大学教育推進部に着任した。専門は教育工学、とくに高等教育をフィールドとした学習環境デザインに関する研究を行ってきた。日本教育工学会や日本教育メディア学会で要職を務めるだけでなく、勤務する関西大学においても教育開発支援センター副センター長を務めている。研究、教育、実務いずれの経験も豊富であり、本講演のテーマには最適な人物であった。

講演会は2022年12月13日17:30-18:30にZoomを使用した遠隔方式で実施した。岩崎氏の講演テーマは「自律的な学習者を育むためのループリック」というものであった。出席者は講演者の岩崎氏を含む34名であった。以下では岩崎氏の講演の内容を簡単にまとめておこう。

まず、岩崎氏はループリックを「学習目標の達成度を判断するため、評価の観点規準」と観点の尺度を数段階に分けて文章記述語）で示した評価の基準から構成される評価ツール」と定義した。そして、大学教育でループリックの導入が求められる背景として、「高等教育が「個々人の可能性を最大限に伸長する教育」に転換」するに伴い「何を教えたか」から、「何を学び、身に付けることができたのか」への転換」が起きていることを指摘した。

とくに、近年ではアクティブラーニングの実践が進んでおり、こうした教育の中で新しい能力の育成を進めていくことが求められている。このような中で大切なことは、自律的な学習者を育成することであり、とくに学生が自分で「できている・できていない」「わかっている・わかっていない」ことを認識する必要性が高まっている。とくに、個別具体的な教育の場面では、学期後ではなく学期中に到達目標を確認する機会を設けることが重要である。教員は、レポートやプレゼンの評価の観点を提示し、「学生が目標にたどりついたのか」「学生がどうやってそこへ行けばいいのか」を自分で知ることをサポートする必要がある。

岩崎氏はループリックを活用しやすい課題として、「レポート」「ディスカッション」「プレゼンテーション」を挙げた。そして、各大学のループリック導入の事例を紹介しながら、各大学が個別の教育目標に応じてループリックを修正し、活用していくことの重要性を指摘した。

岩崎氏によれば、ループリック活用の意義は「パフォーマンスの評価」「学生が学習活動における方向性を理解し、授業目標を達成できたのかを確認する」「学生（同志）のリフレクションの力を伸ばす」「複数人数で担当する教科において教育・評価の質を保つ」という4点にある。学生の「躓き」や理解度が可視化されることで、学生は支援を求めることが容易になり、教員は適切なケアを提供できる。また、初年次教育では同じ内容を複数の教員で教えることが多いが、その際に教育・評価の質を保つためにループリックを導入することは効果的であるという。

ただし、ループリック以外にも様々な評価の方法があり、ループリックは多様な評価方法の一つとして考えるべきである。大事なものは「授業目標／学習のゴール」「教育方法（内容）／学習活動」「評価／フィードバック」という三者のバランスである。また、ループリックの作成においては「暗黙知を形式知化できること」もポイントとなる。なお、ループリックの作成の際には、学習者がねらいを達成できているかを行動として判断できるかが重要である。とくに、学生が理解できる文章になっていることが必要である。

講演後には質疑応答も行われたが、講演と質疑応答の双方により出席者はループリックに関する理解を深

めることができた。とくに他大学での事例を知ることができた点は、本学部でのルーブリック導入の促進を考える際に非常に参考になった。

近年のFD委員会の活動により学部教員にもルーブリックの存在は浸透しているが、導入を広げるという点ではまだまだ課題も少なくない。今年度の講演会の内容を踏まえて、本学部内でルーブリックの導入をさらに進めていくことは次年度の課題となる。

【1】活動報告

① 実施時期：2022年 7 月12日

活動内容：当学部実施の1年生と3年生向けのコンピテンシーテスト2022年度結果（大学内、他大学との比較など包括的なもの）についての報告と質疑を実施した（説明者：株式会社ベネッセiキャリア 黒田氏）。コンピテンシーテストを利用することで多様な能力開発を可視化できることが確認できた。

② 実施時期：2022年 7 月中旬～下旬

活動内容：当学部において、全学実施の授業アンケート調査を実施した。学生の授業満足度は高いものの、分析結果から教科によってはさらに丁寧なフォローが必要であることが分かったので、ミニテストや質問タイムなので確実にフォローを実施するように協議をした。

③ 実施時期：2022年 9 月13日

活動内容：当学部の入試動向について、他大学の競合比較など入試方法別などの資料を基にした説明と質疑を実施した（説明者：株式会社KEIアドバンス 小林氏）。当学部は公募で多くの受験者を獲得できていることが、定員充足率や偏差値の維持に貢献していることが改めて確認された。

④ 実施時期：2023年 1 月中旬～下旬

活動内容：当学部において、全学実施の授業アンケート調査を実施した。学生の授業満足度は高いままであるが、回収率が少し下がっているため、どのように実施すれば回収率の向上が見込めるかについて議論し、ゼミ担当の教員からも締め切り直前に回答依頼を数度出してもらうことになった。

【1】2022年度に教育学部で独自に実施したFD活動について

教育学部では、学園や大学のFD活動とは別に、以下の5回のFD活動を実施した。これらはすべて教育学研究科FD委員会と共催で実施したものである。

1. 学部所有のデジタル教科書・教師用指導書の利用方法と電子黒板の使用についての学習会

日時：2022年4月12日（火）17：50～19：00

場所：教育学部D313教室（電子黒板とWi-Fi設備が常設されている）

講師：坂本徳弥教授・（株）エルモ社員

対象：教育学部・教育学研究科教職員

内容：学校教育のICT化に対応するために、教育学部・教育学研究科教職員に対してICT教具の使い方の講習会を催した。株式会社エルモ社の社員3名を講師として招き、教員が子ども役となり、実際に情報機器を操作しながら技術を習得した。内容は「電子黒板の使い方」「バイシンククラスルームの使い方」「コラボレーションハブの使い方」の3点である。特にバイシンククラスルームについては、公立学校への導入が進んでおり、子ども達がアイパッドに記入した意見や解を教師が手元のパソコンで閲覧したり、代表的な意見を電子黒板に表示して学級全体に共有したりと、今後、授業展開に積極的に取り入れられていく可能性の高い授業技術である。これらについて教員養成に携わる教職員が熟知し、「各教科」や「領域」の指導法の授業において導入することで、学生には十分な理解と技術をもって学校現場に入っていってもらう必要がある。本研修会はそのための貴重な時間となった。

2. 学部所有の電子黒板用タブレット端末の使い方講習会

日時：2022年9月6日（火）15：00～16：00

場所：教育学部D313教室（電子黒板とWi-Fi設備が常設されている）

講師：坂本徳弥教授

対象：教育学部・教育学研究科教職員

内容：新規事業予算で教育学部棟に電子黒板5台とiPad pro 40台が整備されたのを受けて、操作方法についての説明会を催した。アイパッドで利用できる無料の教育アプリを紹介いただき、受講者の教員は、そのうちのひとつ「ぬり絵アプリ」を操作しながら、電子黒板に作品を送信して、電子黒板で全員の作品を鑑賞したり、そのうちのよい作品を選んで拡大表示したりする方法について学んだ。またアイパッドの充電や保管方法、使用者を調整するための仕組みについても共通理解することができた。

タブレットを活用した授業が本格化してきている。大学の教職科目においても、2022年度から「教育の方法と技術」の授業内容からICT活用を分離させ、独立した授業としてシラバスを作成するように文部科学省から指示されている。更に、各教科の指導法の授業においても、「デジタル教科書」を活用した授業方法について扱うようにシラバスを作成する必要に迫られている。そこで、教育学部のICT環境についての情報を共有するとともに、教師用指導書やデジタル教科書の使用法についての理解を促すために、電子黒板と1人1台のタブレットを使用した授業方法の実践について、演習形式で学習した。久しぶりに学生に戻った気分で、和気あいあいとした学習時間であった。

3. 研究倫理に関する講習会

日時：2022年9月27日（火）および10月21日（金）12:30～13:10

場所：教育学部B307教室・Zoomによるオンライン併用

講師：山田真紀教授

対象：教育学部・教育学研究科教職員および教育学部3・4年生、教育学研究科院生

目的：教職員および学生において、研究倫理についての共通理解を図り、特に、卒業論文執筆中の4年生と、修士論文執筆中の修士課程学生においては、盗用や剽窃などの倫理違反を起こさないようにする。

内容：これまで卒業研究や修士論文において、基本的な研究倫理や論文作法をふまえていない研究が散見されていたことから、学部4年生や修士課程2年生の学生が本格的に論文を執筆しはじめる9月に「研究倫理講習会」を催した。また欠席者や復習したい学生のために講習会の様子を撮影し、YouTubeに限定公開することで、講習会の内容が教職員や学生に行き渡るようにした。

4. 「明日の保育・教育を考える」FD講演会の開催

日時：2023年1月28日（土）15:50～17:00

場所：現代マネジメント学部棟206教室

対象：教育学部・教育学研究科教職員および教育学部卒業予定者・在学生・卒業生

目的：教育学部では、毎年、卒業研究発表会のあと、「明日の保育・教育を考える」をテーマとするFD講演会を行っている。今年度は、今年度末をもってご退職される坂本徳弥教授に「最終講義」という形でご講演をお願いした。

内容：最終講義における坂本先生からのメッセージは、以下の3点に要約できる。第1に、子ども達に高すぎない目標を与え、全員が完全にそれを習得することを目指す「完全習得学習」という教育方法があり、子ども達の自己肯定感とやる気を高めることができること。CAI（コンピュータ支援授業）やICT（情報通信技術）を用いた授業は完全習得学習を支える教具となり得る。第2に、家庭科教員の代替として家庭科の研究授業を行う機会があり、そこでミシンのビデオ教材を作ったことが視聴覚教育研究に携わるきっかけとなった。これを契機に大学院に進学して修士号と博士号を取得し、そこで開発した視聴覚教材が各種の賞を受賞するに至った。教員として、機会をとらえ、それを自分の専門性にして研鑽を積むと、大学教員や研究者というキャリアも可能となる。第3に、教職はとても楽しく素敵な職業であること。教職生活で大切にしてきたのは「共感」「ほめる」「世のため人のため」の3つである。

講演会は和やかな雰囲気が進み、学生からも「4月からの教職生活が楽しみになった」「積極的に授業にICTやCAIを取り入れたい」などの感想が寄せられた。

5. 外部評価の伝達と質疑応答

日時：2023年3月14日（火）13:00～14:00

場所：教育学部棟D409教室およびオンライン

対象：教育学部・教育学研究科教職員

目的：教育学部並びに教育学研究科が受けた第三者外部評価委員による評価結果を、報告会を通して全教職員が共有することで、今後の在り方を検討する足掛かりとする。

内容：評価委員長を務められた秋山晶則氏（岐阜聖徳学園大学教育学部学部長）を招き、評価内容を伝達していただくとともに、理解を深めるための質疑応答を行った。教育学部および教育学研究は、ボランティアや実習を核として、理論と実践の往還が可能になるようなカリキュラム構成となっていることが高く評価された一方で、学生が自分の習得できた力を言語化できるように、ポートフォリオとしての履修カルテをより機能的に利用していくべきこと、また、学習成果の客観的把握は困難を伴うが、教職に就いている卒業生からの聞き取り、あるいは、教職課程からベテラン教諭に成長

していくうえでのループリック評価表を開発して、バックキャスティング目標を示す、などの多様なアイデアを示していただいた。

【2】2022年度教育学部FD活動のふりかえり

- ・本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を取りながらも、対面授業が主流となったことから、かなり落ち着いた授業展開ができた。その上で、教員間の自主的な学び合い・協力は継続され、豊かな授業方法習得のための研鑽を更に積むことができた。
- ・特別支援学校教員免許取得課程（コース）が開設された。加えて、国語科の中・高教員免許状取得課程新設の方向性が示され、教育学部の将来を展望した話し合いの場が関係部署で設けられた。教育学部が大きな変革期に直面していることを、共通認識した。
- ・更に、複数の教員の退職が連続し、教員体制が大きく変わる現状に鑑み、情報の共有化と意見交換の場を、日常的に数多く設ける必要を痛感した。
- ・それらを踏まえ、本年度第三者による外部評価を受けたことは、非常に有効であった。
- ・「学生的心声をいかにFDに活かしていくか」については、本年度も取り組むことができなかった。次年度の引き続きの課題としたい。

【1】委員会メンバー及び開催時期

1. メンバー：大見サキエ（委員長）、川島一晃（副委員長）、宇佐美久枝、奥野友紀
2. 委員会開催 9 回
2022年3月、6月、7月、8月（19日、29日）、9月、10月、2023年1月、3月

【2】2022年度看護学部FD委員会の活動目標

コロナ禍での教育、新カリキュラム開始等の背景を踏まえ、教育の質の向上を目指し、相山女学園大学看護学部の教員の資質向上のための活動を行う。

【3】活動内容と結果及び課題

1. 看護学部第1回FD研修会の企画、運営、実施後アンケート調査結果のまとめ
2022年度のFD研修会は、コロナ感染拡大の影響で8月末を予定していたが、2023年3月に延期して、当初予定していた1回目、2回目をまとめて一日で実施した。

午前の部 テーマ：「看護学部の“魅力”を再発見するワークショップ」

日時：2023年3月22日（水）10:00～11:30 遠隔（zoom）

研修内容：事前に各教員から、学部の特徴や魅力について意見を収集し、その資料を参照しながら、グループワークを実施、各グループの内容を発表し、情報共有を行った。

参加者：35名、アンケート回答者：35名（回収率100%）詳細はアンケート結果参照。

アンケート結果：概ね参加者は企画の満足度は高かった。看護学部の魅力について共有できた。

今後の課題：見いだされた看護学部の魅力をさらに発展させた話し合いをもち、入試広報に活用していけるようにする。

午後の部 基調講演

日時：2023年3月22日（水）13:20～14:30

内容：「看護学部における多職種連携について学ぶ」と題して、基調講演（福田由紀子教授：地域・在宅看護学領域）を実施。質疑応答、意見交換を行った。

参加者：35名、アンケート回答者：32名（回収率91%）。詳細は結果資料参照。

アンケート結果：多職種連携について講義内容、多職種連携実践実習の共通理解ができた。

今後の課題：十分な議論はできなかったもので、さらに継続的な議論が必要である。

2. サロン・ド・相山 開催について

看護学部一人の教員を招き、教育・研究・社会貢献活動等について話題提供していただき、ざっくばらんな教員間の情報交換の場とする目的で、自由参加で3回実施した。

第1回 2022年5月23日（月）対面：福田誠司教授 参加者23名（全員参加出来ない日程）

第2回 2022年9月5日（月）遠隔実施：小松美砂教授 参加者22名（全員参加可能日程）

第3回 2022年12月19日（月）遠隔実施：杉浦美佐子教授 参加者28名（全員参加可能日程）

Webアンケート結果：サロンに参加したと回答した29名の回答より、参加したほとんどの人が「多くの学びがあってとても興味が湧いた」と回答していた。しかし、継続したほう

が良いと回答した人が 4 割、どちらでも良いが 6 割であった。講師の負担が増えなければよい、自由参加でFD活動としてよいなどの意見もあった。

今後の課題:サロンの意義はあると考えられるが、継続するかどうかは、次年度の担当で検討していく。

3. 授業聴講制度の推進

- ・授業聴講フィードバックのためのフォーマットを作成し、学部共有フォルダに格納し、誰でもフィードバック用紙を活用することができるようにした。

授業聴講に関するアンケート調査：回収32名（45名対象、回収率71.1 %）

結果の概要：授業聴講した。資料を頂いた人は全体の 5 割(非該当者 8 名含む)聴講した科目は領域の他、担当以外の科目も聴講していた。聴講して学んだことで最も多かったのは、授業計画、授業内容、授業の進め方、時間配分であり、教材、学生との関わり等多くのことを学んでおり、授業者と話したという人も約 6 割あった。授業聴講は有意義だと回答していた。一方、聴講したくてできなかった人でも、今後は聴講したいと約半数が回答していた。

- ・今後の課題：今後も授業活性化のために授業聴講を継続していくが、さらに推進するための方法を検討する。

4. 新カリに基づいた実習アンケート項目の検討と修正

教授会で検討し、最終的に新カリに対応する項目に変更した。

看護学部共有フォルダ「FD関連」に格納した。

5. 授業アンケートの回収方法についての検討および課題

回収方法については、全学FD委員会の方針が出され、当該科目の最終回に時間を少しとり、教室で入力作業を学生にしてもらうということになった。今後もその方法を教員、学生に周知していく。

4 大学院FD活動報告

4－1 大学院FD委員会記録

4－2 大学院授業アンケート

(第1回) 2022(令和4)年5月31日(火) 15:00~15:25	1 報告 なし 2 議題 (1) 2022年度大学院FD委員会活動計画に関する件 (2) 2022年度前期大学院授業アンケートに関する件 (3) その他
(第2回) 2022(令和4)年9月1日(木) メール会議	1 報告 (1) 2022年度前期大学院授業アンケート実施結果について (2) その他 2 議題 なし
(第3回) 2022(令和4)年11月22日(火) ~11月29日(火) メール会議	1 報告 (1) 2022年度大学院FD活動計画検証(中間検証)について (2) その他 2 議題 (1) 2022年度後期大学院授業アンケート実施に関する件 (2) 2022年度FD活動報告書に関する件 (3) その他
(第4回) 2022(令和4)年12月1日(木) ~12月6日(火) メール会議	1 報告 (1) 2022年度FD活動報告書について (2) その他 2 議題 (1) 2022年度後期大学院授業アンケート実施に関する件 (2) その他
(第5回) 2023(令和5)年2月21日(火) ~2月28日(火) メール会議	1 報告 (1) 2022年度後期大学院授業アンケート実施結果について (2) その他 ①「梶山女学園大学・大学院FD活動報告書(2022年度版)」原稿の 締切確認について 2 議題 (1) 2022年度大学院FD活動計画検証に関する件 (2) その他

1. 実施概要

・実施期間

前期：2022年 7 月 11 日（月）～ 2022 年 7 月 30 日（土）

後期：2022 年 12 月 21 日（水）～ 2023 年 1 月 25 日（水）

・実施方法：Google フォームにより Web で実施

2. 実施状況

【前期】

研究科	前期在学者数	回答数	回答率
生 活 科 学 研 究 科	11	5	45.5%
人 間 関 係 学 研 究 科	22	15	68.2%
現代マネジメント研究科	6	2	33.3%
教 育 学 研 究 科	5	1	20.0%
計	44	23	52.3%

【後期】

研究科	後期在学者数	回答数	回答率
生 活 科 学 研 究 科	9	5	55.6%
人 間 関 係 学 研 究 科	23	7	30.4%
現代マネジメント研究科	6	2	33.3%
教 育 学 研 究 科	3	1	33.3%
計	41	15	36.6%

5 研究科FD活動報告

- 5－1 生活科学研究科
- 5－2 人間関係学研究科
- 5－3 現代マネジメント研究科
- 5－4 教育学研究科

【1】実施報告

生活科学研究科は、中部地方初の生活科学系大学院として、衣・食・住に関わる学問の発展に寄与できる人材育成を目標としており、食品栄養科学専攻と生活環境学専攻の2専攻によって構成され、より高度な研究者養成を目指し博士後期課程（人間生活科学専攻）を有している。本研究科のFD委員会は、2012年に発足されて以来、大学院の授業内容や教育方法を改善し向上させるための活動を続けており、2022年度は以下の活動を行った。

1. 研究成果発表会の実施

修士課程の両専攻および博士後期課程における中間発表会、修士論文発表会を開催した。個別の指導教員のみならず、他の教員からも様々な意見や助言を受けることにより、大学院生の研究活動がさらに向上すると考えられ、とても有益な会となった。

（1）大学院修士中間発表会 2022年9月12日（月）

（食品栄養学専攻）

- ・岩崎文江「がん患者の栄養評価におけるPG-SGA（patient generated subjective global assessment）の有用性に関する検討 ～予後推定に注目して～」
- ・御給涼香「チアリーダーの身体組成と食事摂取状況・食態度との関連性に関する検討」
- ・森田友紀乃「食後糖・脂質代謝に対するアミノ酸摂取の影響」

（生活環境学専攻）

- ・青木朱音「マスクの色彩と服装色との関係」

（2）大学院修士論文発表会 2023年2月21日（火）

（食品栄養学専攻）

- ・岩崎文江「がん患者の栄養評価におけるPG-SGA（patient generated subjective global assessment）の有用性に関する検討 ～予後推定に注目して～」
- ・御給涼香「チアリーダーの身体組成と食事摂取状況・食態度との関連性に関する検討」
- ・森田友紀乃「食後糖・脂質代謝に対するアミノ酸摂取の影響」

（生活環境学専攻）

- ・青木朱音「マスクの色彩と服装色との関係」

（3）大学院博士中間発表会 2022年9月12日（月）

- ・渡辺恵里花「脂肪摂取試験による食後代謝を空腹時の値から予測できるか」

2. 授業アンケートの実施

本年度も生活科学研究科に在籍する大学院生を対象に、前期・後期の2回、授業アンケートを実施した。方法は、Google フォームでwebにより実施した。アンケート回収率を、次の表に示す。

	2022 前期	2021 前期	2022 後期	2021 後期
人間生活科学専攻（博士後期課程）	33%（1/3）	0%（0/3）	100%（1/1）	0%（0/3）
食品栄養科学専攻（修士課程）	50%（2/4）	100%（4/4）	75%（3/4）	75%（3/4）
生活環境学専攻（修士課程）	50%（2/4）	60%（3/5）	25%（1/4）	40%（2/5）
合計	45%（5/11）	58%（7/12）	56%（5/9）	42%（5/12）

なお、アンケートの設問内容は、以下のとおりである。

【前期アンケート】※すべて記述形式

- 1) 大学院の授業科目及び研究指導科目で興味深かった点、有益であった点など
- 2) 大学院の授業科目及び研究指導科目の改善すべき点
- 3) 授業環境について、意見・要望
- 4) その他、気づいた点

【後期アンケート】※設問 1-1)～1-3) は選択肢形式、設問 2-1)～2-4) は記述形式

- 1-1) 所属専攻の科目構成は適切か
- 1-2) 所属専攻の時間割は適切か
- 1-3) 研究指導は適切に行われているか
- 2-1) 大学院の授業科目及び研究指導科目で興味深かった点、有益であった点など
- 2-2) 大学院の授業科目及び研究指導科目の改善すべき点
- 2-3) 授業環境について、意見・要望
- 2-4) その他、気づいた点

これらの得られたアンケート結果について、確認と検証を行った。

まず、回収率の向上は全学の課題であり、今年度は回収率の向上を目指して、後期アンケートからは回答しやすい選択肢による設問を設けている。

生活科学研究科の回収状況についてみると、全体としては2021年度、2022年度とも、概ね5割程度の回収率である。前期、後期とも回答した学生は5名であり、設問形式の変更が回収率向上に寄与したとはいえ、次年度以降も継続して検討を行う必要がある。（全学でも、昨年度後期37%、今年度後期37%と、変化はみられない。）

次に、アンケートの回答内容について検証する。後期の選択肢設問では、「2) 時間割は適切か」について、「どちらかといえばそうではない」の回答が1名みられた（食品栄養科学専攻）が、その他項目は全員が肯定的な回答だった。記述形式の授業科目に関わる設問項目（前期1)・2)、後期2-1)・2-2)) について、おおむね良好な回答を得られた。授業環境面（3)、2-3)) については、統計ソフトを自宅でも使いたい、大学院生室のPC・プリンタ整備要望などがみられた。その他（4)、2-4)) では、3階への自動販売機設置要望等の記載があった。

本アンケートの回答結果を踏まえ、大学院生の学修や研究が円滑に遂行できるよう、研究科内で積極的な提案を受けながら様々な意見を集約し、現状の改善を図っていきたい。

3. 博士後期課程学生を対象としたプレFD研修について

昨年度、①博士課程の学生の中で、特に将来大学院教員をめざす可能性のある学生を対象に、「学士課程の授業を担う機会を与えることで、ティーチングに関わる技能を高め、将来の大学教員として指導的役割を果たす人材の育成につとめる。」こと、②昨年度作成した「大学院博士課程プレFD・大学教員プログラム—大学で教えるために—」資料をもとに、大学院生対象のガイダンスで、TAとしての心がまえを、研究科長からレクチャーすることとなった。

今年度は大学院生対象のガイダンスで、博士課程と修士課程の院生に対して、学生を教育指導する観点と研究を指導する観点から説明を実施し、各院生から受講証明書を提出させた。次年度については、大学院生に対する入学生ガイダンスの際に実施することとした。

【1】実施報告

2022年度は人間共生領域に在学生在がいないため、臨床心理学領域のみのFD活動について下記のように報告する。

(1) 研究教育活動**①心理学実験・心理学特殊実験のTA（前後期）**

学部2年生を対象とした心理学実験（前期）、心理学特殊実験（後期）のTAとして、大学院生13名（M1、M2）が1年間（うち3名は半期間）にわたり実験実習をサポートし、心理学研究法の実践的サポート、統計解析、レポート作成の相談にあたった。

②自主課題発表会（2023年1月12日）

心理学特殊実験の成果を発表する自主課題発表会において、大学院生（M1）5名が会場の司会（座長）として運営に携わった。

③修士論文中間発表会（2022年4月15日、4月22日、5月6日、2023年2月24日、3月1日）

2022年10月に修士論文を提出する予定であった大学院生（M2）が、2022年4月15日、4月22日、5月6日に、各日2名ずつ発表を行った。これは毎年実施し、複数の教員と全大学院生（M1、2）が参加した。発表者である大学院生は指導教員による指導を超えて、他の教員や大学院生からさまざまな助言指導を得ることにより、より広い観点から研究にアプローチする力が涵養される。また、2023年10月に修士論文を提出する予定である大学院生（M1）が、2023年2月24日に11名、3月1日に1名発表を行った。

④臨床心理相談室紀要『相山臨床心理研究』の発行

教員6名が研究論文を執筆し、大学院生（M2）6名が事例研究を執筆した（2023年3月9日発行）。大学院生の事例研究については、原則として外部の臨床心理士や精神科医からコメントをいただき、事例の理解や自身の臨床実践上の課題などを振り返ることにより、その後の臨床実践や研究に示唆を得る好機となっている。

⑤オープンキャンパス

院生9名が分担して、3回の学科展示企画の紹介と、心理検査体験の補佐を行った。

(2) 臨床実践**①面接の個別指導**

臨床心理士資格試験の一次試験に合格した全員に対して、教員が分担して面接に対する個別指導を行った。

②公認心理師試験・臨床心理士資格試験対策講座

2023年2月16日から3月24日まで計6回、公認心理師試験・臨床心理士資格試験対策講座を外部講師と契約して開催した。参加者はM1が5名、M2が1名の合計6名であった。

③WISC-V（知能検査）研修会

知能検査WISC-Vから改定されたWISC-Vの学外研修会を教員が受講し、それに基づいて2023年3月13日に研修会を実施した。参加者はM1が5名、M2が5名の合計10名であった。

④臨床心理相談室ケース報告会（2023年3月4日）

臨床心理相談室では参加可能な全相談員・実習員（非常勤相談員・ケースを担当している大学院修士

生・大学院生)が一同に会し、年1回のスタッフ会議を行った。大学院生・修了生には、組織における臨床相談上の実践的な課題などを検討する好機となり、非常勤相談員には相談室運営上の課題などの共有の場となった。

⑤日進市教育委員会との連携事業

- ・発達障害保護者相談会：日進市内の小中学生の保護者を対象として子どもの発達障害に関する相談会を開催した(2022年9月15・16日の2日間)。教員8名と相談員1名が保護者18名の相談を受けた。
- ・小中学校への巡回指導：教員が市内の13小中学校に、前後期を通じ原則として2回出向いて巡回指導を行った(2022年6月～2023年3月)。

【2】2022年度大学院授業アンケート結果

前期・後期それぞれに実施された大学院授業アンケート結果の確認・検証について、2022年度は人間共生領域に在学生在がおらず、臨床心理学領域のみから回答を得たことから、臨床心理学領域の確認・検証結果を報告し、最後に研究科の視点で総括する。

〔臨床心理学領域〕

前期開講科目について、良好な評価が得られた科目は「心理療法特講Ⅰ(心理支援に関する理論と実践)」「心理学研究法特講」「臨床心理学特講Ⅰ」「臨床心理査定演習Ⅰ」「産業組織心理学特講(産業・労働分野に関する理論と支援の展開)」であったが、中でも「心理療法特講Ⅰ(心理支援に関する理論と実践)」「臨床心理学特講Ⅰ」「産業心理学特講」に対して高く評価する記述が多かった。また、「臨床心理学基礎実習Ⅰ」「心理実践実習ⅡC」はケースカンファレンスであるが、そこでの議論や自分自身の発表を通して多くの気づきを得られたとの評価も多かった。学外実習についても、現場での学びについて良好な評価が得られた。その一方で、「臨床心理学特講Ⅱ」「臨床心理査定演習Ⅰ」「臨床心理査定演習Ⅱ」「障害者心理学特講」に対しては改善の要望があった。

後期開講科目について、良好な評価が得られた科目は「心理療法特講Ⅱ」「精神医学特講」「事例研究Ⅰ」であったが、中でも「心理療法特講Ⅱ」「精神医学特講」に対して高く評価する記述が多かった。「臨床心理学実習Ⅰ(学外実習)」「臨床心理学基礎実習Ⅱ」(ケースカンファレンス)についても良好な評価が得られた。その一方で、「臨床心理査定特講(心理的アセスメントに関する理論と実践)」「人間関係論Ⅰ(臨床心理学的研究)」に対しては改善の要望があった。

前期・後期ともに、特別研究については、ていねいな指導への評価があった。

改善の要望があった科目については、授業の進行の度合いや、心理検査の習得に関する内容であった。これらの指摘は院生の理解度に幅があることが関係しているが、改善すべき点としては、院生の理解度に幅があることを踏まえつつ、それを補完するような資料提示の方法や、個別の質問への対応方法などの検討が必要とされる。今年度、授業時間外に別途、心理検査の研修会を開催する対応を実施した。

また、環境面ではコロナ禍のため、換気のためにある程度の幅で窓を開けており、前期はエアコンの効きが悪い、後期は寒いという指摘があった。来年度はコロナの5類への変更に伴い、換気方法の検討が必要とされる。

〔総括〕

臨床心理学領域では、実質的な授業改善効果を得るために、授業アンケート結果について話しあうだけでなく、改善の要望があった科目の担当者は具体的な改善の工夫を書いて領域代表に提出することとし、経年変化をフォローする検証システムを2022年度から開始したところである。しかしながら、前期に改善の要望が出た科目担当者に対しては後期の別科目でも改善の要望が出ており、現時点では効果が得られたとはいえない。この点については今後も変化をフォローしながら、対策を検討する必要があるだろう。

【1】活動報告

① 実施時期：7月中旬～下旬

活動内容：当研究科において、全学実施の授業アンケート調査を実施した。学生数が少ないので、アンケート以外に主指導教員が各科目の難易度や授業の早さなどについてきめ細かくヒアリングを行って理解度や満足度を向上させることになった。

② 8月2日13時30分～15時：第1回修論構想合同発表会（1年生）

4月までに提出していた研究計画をより具体化し、研究手法や研究対象をより精緻化した内容にして発表会を実施した。普段、指導を受けている教員以外からも多様な意見や親身なアドバイスが寄せられ、学生たちの研究意欲が増進するとともに、文献調査や収集の効率化についてのソフトウェアの活用方法など、教員の持つ様々なスキルが可視化された。

③ 同上15時30分～18時30分：修論中間合同発表会（2年生）

事例や分析のために欠けているデータについて、どのように収集すればよいかについての具体的なアドバイスや、論の立て方についてよりスマートな方法などの議論が展開された。

④ 12月6日17時30分～18時30分：第2回修論構想合同発表会（1年生）

8月に実施した第1回発表会で得られた知見をもとに、学術論文に資する内容の骨子を発表できるようになっていた。

⑤ 同上15時30分～18時30分：修論最終合同発表会（2年生）

最終段階の論文について発表し、より考察を深めて質の高い論文にするためのアドバイスや具体的な方法などの議論が交わされた。

⑥ 実施時期：2023年1月中旬～下旬

活動内容：当研究科において、全学実施の授業アンケート調査を実施した。もともと対象人数が少なく、具体的な記載内容も限られていたので、指導教員が具体的な改善内容を聞き取るなどして授業改善のための情報の補足収集を行った。

【 1 】 2022年度教育学研究科独自FD活動報告

教育学研究科では、学園や大学のFD活動とは別に、以下の5回のFD活動を実施した。これらはすべて教育学部FD委員会と共催で実施したものである。

1. 電子黒板の使い方講習会

日時：2022年4月12日（火）17時50分～19時

場所：教育学部D313教室

講師：坂本徳弥教授・（株）エルモ社員

対象：教育学部・教育学研究科教職員

内容：学校教育のICT化に対応するために、教育学研究科教職員に対してICT教具の使い方の講習会を催した。株式会社エルモ社の社員3名を講師として招き、教員が子ども役となり、実際に情報機器を操作しながら技術を習得した。内容は「電子黒板の使い方」「バイシンククラスルームの使い方」「コラボレーションハブの使い方」の3点である。特にバイシンククラスルームについては、公立学校への導入が進んでおり、子ども達がアイパッドに記入した意見や解を教師が手元のパソコンで閲覧したり、代表的な意見を電子黒板に表示して学級全体に共有したりと、今後、授業展開に積極的に取り入れられていくであろう授業技術である。これらについて教員養成に携わる教職員が熟知し、「各教科」や「領域」の指導法の授業において導入することで、学生には十分な理解と技術をもって学校現場に入ってもらう必要がある。本研修会はそのための貴重な時間となった。

2. 電子黒板用タブレット端末の使い方講習会

日時：2022年9月6日（火）15時～16時

場所：教育学部D313教室

講師：坂本徳弥教授

対象：教育学部・教育学研究科教職員

内容：新規事業予算で教育学部棟に電子黒板5台とiPad pro 40台が整備されたのを受けて、操作方法についての説明会を催した。アイパッドで利用できる無料の教育アプリを紹介いただき、受講者の教員は、そのうちのひとつ「ぬり絵アプリ」を操作しながら、電子黒板に作品を送信して、電子黒板で全員の作品を鑑賞したり、そのうちのよい作品を選んで拡大表示したりする方法について学んだ。またアイパッドの充電や保管方法、使用者を調整するための仕組みについても共通理解することができた。

3. 研究倫理に関する講習会

日時：2022年9月27日（火）および10月21日（金）12時30分～13時10分

場所：教育学部B307教室・Zoomによるオンライン併用

講師：山田真紀

対象：教育学部・教育学研究科教職員および教育学部3・4年生、教育学研究科学生

目的：教職員および学生において、研究倫理についての共通理解を図り、特に、卒業論文執筆中の4年生と、修士論文執筆中の修士課程学生においては、盗用や剽窃などの倫理違反を起こさないようにする。

内容：これまで卒業研究や修士論文において、基本的な研究倫理や論文作法をふまえていない研究が散

見されていたことから、学部4年生や修士課程2年生の学生が本格的に論文を執筆しはじめる9月に「研究倫理講習会」を催した。また欠席者や復習したい学生のために講習会の様子を撮影し、YouTubeに限定公開することで、講習会の内容が教職員や学生に行き渡るようにした。

4. 「明日の保育・教育を考える」講演会

日時：2023年1月28日（土）15時50分～17時

場所：現代マネジメント学部棟206教室

対象：教育学部・教育学研究科教職員および教育学部卒業予定者・在学生・卒業生

目的：教育学部では、毎年、卒業研究発表会のあと、「明日の保育・教育を考える」をテーマとするFD講演会を行っている。今年度は、今年度末をもってご退職される坂本徳弥教授に「最終講義」という形でご講演をお願いした。

内容：最終講義における坂本先生のメッセージは以下の3点に要約できる。第一に、子ども達に高すぎない目標を与え、全員が完全にそれを習得することを目指す「完全習得学習」という教育方法があり、子ども達の自己肯定感とやる気を高めることができること。CAI(コンピュータ支援授業)やICT(情報通信技術)を用いた授業は完全習得学習を支える教具となりうる。第二に、家庭科教員の代替として家庭科の研究授業を行う機会があり、そこでミシンのビデオ教材を作ったことが視聴覚教育研究に携わるきっかけとなった。これを契機に大学院に進学して修士号と博士号を取得し、そこで開発した視聴覚教材が各種の賞を受賞するに至った。教員として、機会をとらえ、それを自分の専門性にして研鑽を積むと、大学教員や研究者というキャリアも可能となる。第三に、教職はとても楽しく素敵な職業であること。教職生活で大切にしてきたのは「共感」「ほめる」「世のため人のため」の3つである。講演会は和やかな雰囲気が進み、学生からも「4月からの教職生活が楽しみになった」「積極的に授業にICTやCAIを取り入れたい」などの感想が寄せられ大変好評であった。

5. 「第三者外部評価」の評価内容に関する研修会

日時：2023年3月14日（火）13時～14時

場所：教育学部棟D409教室およびオンライン

対象：教育学部・教育学研究科教職員

目的：今年度、相山女学園大学教育学部・大学院教育学研究科は、3つのポリシーに沿って教育研究や運営が適切に行われているかどうかについての、自己点検・評価結果の妥当性及び客観性を高めるため、第三者外部評価を実施した。評価委員長を務めた秋山晶則氏（岐阜聖徳学園大学教育学部学部長）を招き、評価内容を伝達していただくとともに、理解を深めるための質疑応答の時間を設けた。教育学部および教育学研究は、ボランティアや実習を核として、理論と実践の往還が可能になるようなカリキュラム構成となっていることが高く評価された。一方で、学生が自分の習得できた力を言語化できるように、ポートフォリオとしての履修カルテをより機能的に利用していくこと、また、学習成果の客観的把握は困難を伴うが、教職に就いている卒業生からの聞き取りという方法もあること、教職課程からベテラン教諭に成長していくうえでのループリック評価表を開発して、バックキャスティング目標を示すこと、などの改善のための多様なアイデアを示していただくことができた。

【2】授業アンケートおよび在学生への聞き取りの分析

授業アンケートに記載された自由記述と、在学生全員に実施した聞き取り調査(2022年9月に実施)により、教育学研究科が現在抱える課題と、その改善のためのアイデアを得ることができた。

(1) 在学生が少ないことのメリットとデメリット

在学生が少ないことから、院生の修士論文のテーマや関心を軸にして、授業計画を立てることができるため、学生は教育理論や保育理論を自分の研究テーマとの関連で理解し、各授業を修士論文のための研究に活かすことができたことが、授業に対する高い満足を引き出したようだ。一方で、受講生が1～2名という授業がほとんどとなるため、多様な立場や観点から意見を交流させることが難しいという課題もある。大学院の授業を研究科で開放し、他研究科の大学院生も受講可能にするなどして、改善を図る必要がある。特に、人間関係学研究科と教育学研究科は「教育」「心理」という点で共通するテーマも多く、連携が期待される。

(2) インターンシップについての改善点

インターンシップは教育学研究科の特色となる重要な授業科目であるものの、以下の2つの課題がある。第一に、「研究指導教員」「インターンシップ担当教員」「受け入れ先の教員」と、関わる教員が多いことから、3者のコミュニケーションを密にして、教育と研究の両面でインターンシップが実り多いものになるように配慮していく必要がある。それぞれの教員において共通理解がないと、インターンシップで何を指すのか（特に教員・保育者養成と研究とのバランス）において齟齬が生じ、学生を混乱させることになる。第二に、現職教員として大学院に在籍している学生にとっては、インターンシップの授業が免除されるものの、それを補填するための6単位を他の授業で埋めなければいけないという状況に置かれ、授業負担がかえって重くなるということが生じている。現職ということで、インターンシップの6単位が自動的に認定される仕組み、あるいは、現職の教員もインターンシップの授業を受講し、インターンシップ先を現職の学校とすることで、現職の学校にインターンシップ担当教員が訪れ、授業や研究についての助言を行うなどの工夫ができるようになるとよい。

(3) その他

「学会発表の機会を与えていただき、さらに新規事業予算により旅費の手当がされることに大変感謝している」「研究の成果を附属校や附属園で披露する機会を得られてよい刺激になった」という意見もあった。

6 FD委員会名簿

2022年度全学FD委員会委員

所 属	職位	氏名	選出区分
学長補佐	教授	長澤 唯史	学長補佐
生活科学部	准教授	井上 尚子	学部FD委員
国際コミュニケーション学部	教授	影山 穂波	学部FD委員
人間関係学部	教授	田村 雅夫	学部FD委員
文化情報学部	教授	飯塚 恵理人	学部FD委員
現代マネジメント学部	教授	大串 葉子	学部FD委員
教育学部	教授	石橋 尚子	学部FD委員
看護学部	教授	大見 サキエ	学部FD委員
文化情報学部	准教授	木田 勇輔	学長指名

2022年度大学院FD委員会委員

所 属	職位	氏名	選出区分
学長補佐	教授	長澤 唯史	学長補佐
生活科学研究科	准教授	川野 紀江	研究科FD委員
人間関係学研究科	准教授	鈴木 亮子	研究科FD委員
現代マネジメント研究科	教授	大串 葉子	研究科FD委員
教育学研究科	教授	山田 真紀	研究科FD委員

相山女学園大学・大学院FD活動報告書（2022年度）

相山女学園大学・大学院ファカルティ・ディベロップメント
第10号（通巻 第23号）

2023（令和5）年6月発行

編 集	相山女学園大学大学院FD委員会・全学FD委員会 （2022年度・2023年度委員長 長 澤 唯 史）
発 行	相山女学園大学 〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町17-3 TEL 〈052〉 781-1186（代）